

# データが語る “いま”

本川 裕



第24回（最終回）

## 男女は苦楽をともにしているか

「夫婦は苦楽をともにすべきだ」とされるが、現実には、そう簡単にうまくはいかないことが多いといえよう。

統計数理研究所が5年おきに継続して行っている「日本人の国民性調査」は、長期的な日本人の状況変化や、それを反映した意識変化を追うためには、まさに貴重なデータ源である。

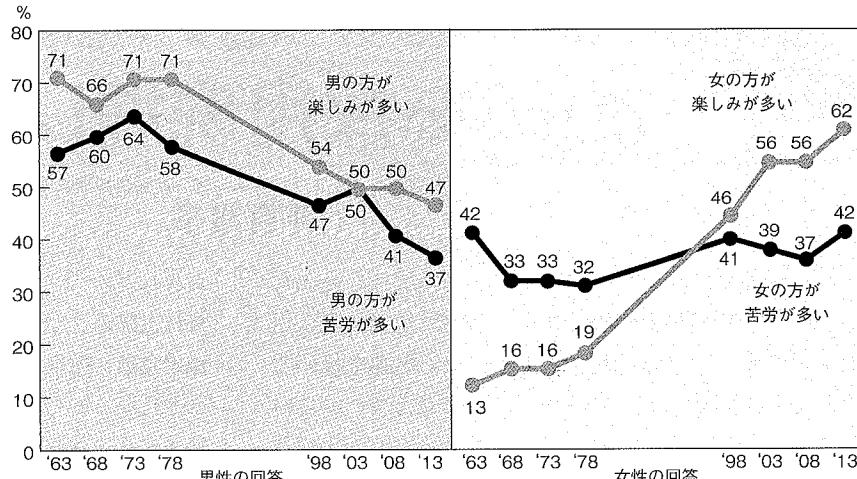
調査項目のなかに、男女どちらのほうが苦労が多いか、また、楽しみが多いかという2つの設問がある。今回、掲げた図は、男の苦労と楽しみを男性の回答から追い、女の苦労と楽しみを女性の回答から追った結果である。男女計の集計結果だと異性に対する他者評価が含まれてしまうので、ここでは男女別の自己評価の推移を追ったものを取り上げる。

この図で男女の苦楽の状況をたどつてみると、男性は、以前から変わらず、女性との対比では楽しみのほうが苦労より多いと感じている。一方、女性は、かつては男性とは異なって楽しみより苦労が勝っていると感じていたのに、いまでは、楽しみのほうが苦労を大きく上回ると感じるようになっているという大逆転が起こっている。

この調査では「もういちど生まれかわるとしたら、男がいいか、女がいいか」という設問も継続的に調査している。男性は以前から一貫して、男が

図 苦楽に関する男女の自己評価の推移

今の日本では、ひとくちでいと、男と女ではどちらの方が苦労／楽しみが多いと思いますか？



(資料) 統計数理研究所「日本人の国民性調査」

いいという者が多数派である。しかし、女性は、以前は男がいいという者のほうが多いかったのに、いまでは、圧倒的に、女がいいと思うように変化している。今回掲げた男女の苦楽に関する自己評価の変化が、これを裏づける大きな理由になっているのではないだろうか。

図をよく見てみると、もう1つ、重要なことに気づかされる。すなわち、男性のほうは、苦労にせよ楽しみにせよ相対的に小さくなってきているのに対し、女性のほうは、苦労は一度下がった後、いくらか増加傾向であり、楽しみは一貫して急拡大と、両方とも上昇傾向にある。人生を送るなかで、男性は苦楽のテンションが下がり、女性は苦楽のテンションが上がっているのである。女性は苦労が多くなったと感じているが、それ以上に、楽しみが多くなったとも感じており、生きる醍醐味を大いに味わうようになったといえるだろう。反対に、男性は以前の威

勢のよさがみられなくなったといえる。

かつては、男性が女性を置き去りにして、自分たちだけ苦労したり楽しんだりしていた男性中心社会だったが、いまは逆に、女性のほうが、男性を置き去りにして、自分たちだけで苦労したり楽しんだりしている女性中心社会になったように見える。男女が苦楽をともにする社会が望ましいといえるとしても、なかなか、そのバランスをとるのは難しいようだ。

2年間にわたり、本コーナーで、あまり気づかれることがないけれども見逃せないと私が感じるデータを紹介させていただきました。どれだけお役に立てたかわかりませんが、面白いと感じていただいた方には「社会実情データ図録」サイトにもアクセスしていただければ幸いです。

「社会実情データ図録」サイト

<http://www2.ttcn.ne.jp/honkawa/>



ほんかわ・ゆたか

東京大学農学部農業経済学科出身。(財)国民経済研究協会常務理事を経て、アルファ社会科学(株)主席研究員。現在、幅広い分野の統計データをグラフ化して公開する「社会実情データ図録」サイトを主宰しながら、地域調査等に従事。著書に『統計データはおもしろい!』(技術評論社)、『統計データが語る 日本人の大きな誤解』(日経プレミアシリーズ)など。